『語学教育研究論叢』第 35 号

『海外奇談』における漢語考
―水滸語彙を軸に―

于　増輝

A study of colloquial Chinese vocabulary in Haiwai Qitan

Zenghui YU

摘要

汉文小说《海外奇谈》（以下简称《奇谈》）文中使用的词汇，一部分可以在《水浒传》中看到。虽然不能断言这部分词汇就是引用于《水浒传》，但是从当时《水浒传》在日本的传播情况分析，出自《水浒传》的可能性很高。以《奇谈》、《水浒传》中都存在的白话词汇为研究对象，参照水浒唐话辞书中的解释，分析研究这部分词汇在《奇谈》中的使用情况。

0. はじめに

漢文小説『海外奇談』（以下『奇談』と略する）に使用された白話語彙について、『水滸伝』にも確認できたものの数が多いのである。これらの語彙は必ずしも『水滸伝』から引用したとは言い切れないが、『水滸伝』が当時の一定の文学作品に影響を与えた面から考えると、これらの語彙は『水滸伝』から引用した可能性が高いと思われる。『奇談』における『水滸伝』にも確認できる白話語彙を対象として、水滸に関する唐話辞書の解釈を参照し、『海外奇談』における使用状況を考察してゆきたい。

1.『奇談』と『水滸伝』の共通語彙

『海外奇談』の成立、版本、先行研究などについては、「『海外奇談』における漢語攷―唐話辞書における解釈を中心に―」（『外国語研究』14 号 2012）を参照されたい。本稿利用した底本については、文化 12 年成立、鴻濛陳人重訳海外奇譚『忠臣蔵』である。

『奇談』と『水滸伝』の共通語彙をまとめ、水滸辞書『水滸伝譯解』[1)]（以後『譯解』と略する）、『忠義水滸伝鈔譯』[2)]（以後『鈔譯』と略する）における解釈と比較し表 1 の通りにまとめた。

表 1

番号	語彙	『奇談』	『譯解』	『鈔譯』
1	連珠箭的苦難	オフタリノミノサイナン（お二人の身の災難）	二ツダマノ鉄砲ニアタリタヤウナ	ツゞケサマニ矢ヲ射ルガコトククチヲトゞメス苦ヲサケブ
2	漆穿鴈嘴鉤搭魚腮	オクバニモノヲハサンダヨウナ（奥歯に物を挿んだような）	モノヲイハヌコト也	甚ダ苦ニナルコト
3	欺負	ミアナドリ（見侮り）	アサムク	アナドル
4	不合	ブレイ（無礼）	スマジキコトニト云辞	
5	装做愰子	グワイブンカヽス（外聞斯かす）	血テ血ヲアラフカンムリ　若此ヲ説出セハ你ノ幌子ヲヨソヲヒカザルト也	幌子ハ家ノ中ノトバリナリ幌子ヲ装フトハ本ハ外聞ヲツクラワフナレトモ辞ヲウラニ用テ外聞ヲ失フコトニナル
6	争些兒	アブナイコト（危ないこと）	ホドンド。スデノコト	険些児同シアブナイカゲン　アブナイカゲンスデノコト

7	壁廂	ズンド		一邊ト同シカタハラデ也
8	這般田地	カヤウナバシヨ（このような場所）		場所也
9	兜搭	イブカリ（訝り）	ムツアシキコトト云コト也ムツカシキ人ヲ兜答的人ト云	人ノ生レツキノアシキ意地ノアルコト
10	指點	サシヅ（指図）	サシズ	サシヅスル
11	門路	テダテ（手立て）	スチミチ	手ヨリノ處
12	印信	インキヤウ（印形）	官府ヨリ。ヲユルシノ印ヲ云又私下	證印ナリ
			ノ印ニテモ官府ヨリノ仰セヲ以スルヲ云也改ムヘキ人或イギニ及フ寸ハコノ印ヲ示ス也	
13	苦捱了	コシエテイル（こしえている）	モト延引スルコトナレトモ　コヽハコタヘテミルコト	ヤタマルヒマヲ入ルヽ也
14	擔擱	ヒマトロ（暇取ろ）	エンイン	躭閣同シユダンシヒマヲ逼留する
15	號	アイコトバ（合言葉）	アイヅ	アイヅ
16	難道	イハマイ	ナントヽ云辞也此ニハ思ヘハト云意ヲ含	ナントソウナラフカトトガメタル辞
17	搭識	ネンコロシテイル（懇ろしている）	トリ合也　情通スルコト	チカヅキニナリ互イニ子ンゴロニナリタルコト
18	擺撥（不開）	ヒマハゴサラヌ（暇はござらぬ）	サバキキラス	用事ガマダシマイアケラレヌ
19	發話	ミヽツニハナシテ（秘密に話して）	声高ニ云也	ワヽリ出ス
20	陪話	イヽワケ（言い分け）	ワビコト	ワビコト

21	屈戌	カケガネ（掛金）	カケガ子	カドガネ
22	風話	オドクバナシ（御毒話）	ワツサリトシタルハナシト云コトニテイルハナシナトヲ云	テンガウバナシ
23	死命	イノチヲマデ（命をまで）	命ヲステヽ	命限リニ
24	喉急了	オホイキツイ	衣食ノコト窮ノコト	アセリテ気ノセクコト
25	胡梯子	ダンバシゴ（段梯子）	ハコバシゴ	ハコバシゴ
26	結果	ウチハタサント（打ち果たす）	シマワセン	シマイヲツケルコト
27	出籍	カンドウ（勘当）	カンドウメ帳面ケス也	勘當メ在所ノ人数帳ニツカヌコト
28	價哭	ヒヾクハカリヒカバカリ（響くばかりひがばかり）	大ニ哭スル也	價假通音
29	没出豁	ワケモナイ（訳もない）	アカリヘダサレヌ	アトニテラチノアカヌコト
30	遮莫	右　サモアラバアレ（さもあらばあれ） 左　ドフヂャアロト（どうじゃあろうと）	トモアレカクモアレ	ナンタル
31	不便當	フヂユウ（不自由）	カツテ	不勝手ナルベシ
32	見怪	ニクトオモヒ（憎と思い）	武松リョクハイヲウラム也　コヽハワビルコトトミルヘシ	フトツケト思フコト
33	謝天地	アリガタヒ（ありがたい）	天地ニ御礼申スホドノ義也　カヘルガ重畳目出度ト也	マヅカタジケナシト云コト慚愧モカタジキケナシナレトモ用ル場所勢ガ少シチガフ箇様ノ辞ツカイヲ處處見合

				セテ用ベキ場所ニ會得スベシ方ナクテハ力説ニ通暁シタトハ云ハレヌナリ
34	面皮	カホツキ（顔付）	顔	顔色
35	調遣	ゲタシテ（蹴出して）	サシヅ	サシヅ
36	偏生	イヂワルク（意地悪く）	ソレニカキツテ偏ノ字ハ皆カギツテト云コト	ヒトエニイヂワルフト云フナリ生ハ付字也
37	托盞	サカヅキ（盃）	チャタイ	茶臺ナリ本邦ニデ盃臺ヲ托盞ト云唐様ナレトモ世人心ガ付ヌナリ此類今日ノ辞ニ多シ
38	敗缺屈査	フトゞキトテセンギシタラバ（不届きとてせんぎしたらば）	彼カラ便宜ヲ此方へ討メテ彼ニチトソンヲサセテ此方シテヤルヘシ	ヲツチシソンジナリ
39	賣弄	ジマン（自慢）	ワカコトヲ自満スルモ賣弄ト云人ノコトヲソタテノボスモ賣弄ト云	此処ハホメソヤスコト常ニハ自慢スルコトニ用ユ
40	巴不到	マチカネタ（待ちかねた）	マチカ子ルコト也	マチカ子ル辞ナリ　オヨギツクヤウニ待久シク思ナリ
41	聒噪	ザワザワトヤカマシヒ（ざわざわと喧しい）	ヤカマシキ	ヤカマシキコト此処ニテハコメンドウナガラト云コト
42	巴不能	トツハカワト	マチカ子テ	待カヌル
43	一五一十	イチブシジウ（一部始終）	一ブシジフ	イチブ始終也
44	遮蓋	カブッテ（被って）	ヲシツヽム	アシキコトヲ蓋シテカクスコトシレヌヨウニドジグジニシテクレヨ

45	主管	テダイ（手代）	ヲモテダイ	商家ノヤトイ手代也　店ヲ開ケバ主管ヲ雇フナリ夥計トモ云唐土ニテハ官人モアキナイヲスルコトアリ
46	後日	ミヤウニチ（明日）	メウ日也	アサツテ
47	烟花	クガイ（苦界）	イタヅラ	娼妓
48	勾摂	メシトリツレユキ（召し取り連れ行き）	勾―ハヒツカケサバク也	勾攝トハ本役ノ人不在ユエニ假リ役ヲ當分攝シツトムルナリ
49	将就	ヨイカゲンニ（良い加減に）	他ヲ周全メヨクシテヤルコト	你等ヲヨイカゲンニ吟味スベシ
50	出尖（策応）	センヂンゴヂン（先陣後陣）	尖ハ物ノ梢末ノトガリ也故開端ノ意也一番ニ手ヲダシテト云コト。案ニツマミ出ス也四十二回尖着指頭ノ句アリ	一番先ヘ出ルコト
51	守奈	カンニン (堪忍)	リタヘヨ	奈耐通スシンボウスルコト
52	家當	イエヤシキ (家屋敷)	カザイ	ドウクシロモノナリ行貨モ同シ質物モ當ト云
53	頂替	ミャウダイ（名代）	代ルコト也頂ハ引ウケルコト	名代ニカワリツトメルコト
54	消停	シバラク（暫く）	トウリウ	マツコト幾日アイダヲオイテ
55	好好	トツクリ（とっくり）	ヨロシクヨクヨク也	好一字意トツクリト、云コト
56	撒嬌撒痴	ヘバリツイテトチクルウ（威張りついてとち狂う）	アマヘルコト。ワケモナイコトヲタノム	ヨレツモツレツシナダレルコト色々ト媚ヲアラワスナリ撒ノ字アシキ方ニ用ユ撒頼撒澆ニテ會得スベシ

57	眼睜睜	ニラミツケ（睨み付け）	ジロジロトマブルト云辞	目ヲミツメテ居ルナリ此処ハ杖柱トクノミニメ守リ居ル
58	打扮	デタチ（出立ち）	出タチ	イラダチ
59	索性	イッソ（いっそ）	ムシロ	イツソノコト
60	暗裏	ヨソナガラ（よそながら）	人シレス	ヒソカニ
61	搶白	ツヽカヽル（突っかかる）	シラシラシイ詞也アカラサマナル齒ニキヌキセヌ辞	面折ナリツラノ皮ヲマノアタリムクコト
62	禿禿	タヽヒトリ（ただ一人）	銀ノヒカル顔出主ハ座ヘ出テ打テニナルコト也	コロリト出スコト

2. 表の分析研究

（1）『奇談』に見え『水滸伝』にも確認できた語彙は全部で 62 個ある。『奇談』は『仮名手本忠臣蔵』の筋や展開を変えず、中国口頭語に訳した書物である。文脈上は『水滸伝』からの影響を受けていなかったにも関わらず、水滸語彙を数多く利用している。これもまた当時の水滸熱表われの一つの証拠になろう。

（2）1815 年に出版された『奇談』の傍訳は『譯解』（1727）、『鈔譯』（1760 以後）の解釈と比較してみると、一致するものが殆どない。『奇談』の作者はこれらの水滸辞書を参照される可能性が極めて低いということになる。実際に、「『奇談』は『小説字彙』[3]（以後『字彙』と略する）に収録されている語句を用いて訳され、その中の誤字脱字を改めずにそのまま引用した」と先学[4]に指摘されてきた。

3. 中国近世漢語の意味とずれがあると思われる語彙

以上取り上げられた言葉の中に、中国近世漢語の意味とずれがあると思われる語彙がいくつある。これらの語彙について、『譯解』、『鈔譯』及び『字彙』における解釈を明記するうえに、『奇談』にどのように使われているか

を明らかにするために、『奇談』の原文と現代訳（筆者訳）を挙げた。括弧の内容は『奇談』における傍訳と頁数である。

◎連珠箭的苦難（オフタリノミノサイナン・74 b）

『譯解』二ツダマノ鉄砲ニアタリタヤウナ

『鈔譯』ツヾケサマニ矢ヲ射ルガコトククチヲトヾメス苦ヲサケブ

（活佳児）只恨他不来與我告別、那裡得知連珠箭的苦難、阿爺年老死于非命、更苦是丈夫、半路上的人手而死了、好生悲哀。（『奇談』）

〈活佳児は言う〉（私は彼が別れを告げてくれないことを恨んでいるが、二人は災難に遭ったのはどこで知るのか。父は年を取って横死し、更に可哀そうなのは私の旦那で、まだ人世の半ばで人手にかかって死んだ。本当に悲しい。）

「連珠箭」は「連続に発射する矢のこと」であるが、『奇談』において、「お二人の身の災難」と振られ、活佳児の父親、夫の二人の死を意味する。文脈に合わせた訳だと思われる。

◎漆（ママ）穿鴈嘴鉤搭魚腮（オクバニモノヲハサンダヨウナ・68b）

『譯解』モノヲイハヌコト也

『鈔譯』甚ダ苦ニナルコト

『字彙』キガヽリ

（九太夫）頭遭力彌拿来的封信、放心不下、心裏像箭穿鴈嘴，鉤搭魚腮一班、我後来通知與你、且要装做我回去的模様、只你跟着轎邊而去。（『奇談』）

（私〈九太夫〉は力彌が先ほど持ってきた手紙に気になり、心の中は奥歯に物を挿んだように落ち着かない。あなたに知らせるが、私は帰る振りをして、あなただけがかごと一緒に帰れ。）

『奇談』において、「奥歯に物を挿んだよう」と振られ、「相手に対して、なんとなく隔てを感じる。また、なにか心に引っかかるものが残る」という意味である。この意味は『奇談』の文脈に合うが、言葉自身はこのような意味がなく、中国近世漢語の意味と大いに違うのである。

◎装做愰子（ガイブンヲカヽス・5a）

『譯解』装你的幌子カンムリヲ血テ血ヲアラフ。若此ヲ説出セハ你ノ幌子ヲヨソヲヒカザルト也反語也

『鈔譯』幌ハ家ノ中ノトバリナリ幌子ヲ装フト云ハ本ハ外聞ヲツクラワフナレドモ辞ヲウラニ用テ外聞ヲ失フコトナル

愰：揺れ動く、ゆらゆら揺れる。近代漢語には、「愰子」という言葉がなく、「幌子」の誤記だと考えられる。中国文献で確認できたのは「装幌子」である。

却是師直手澤的情書、慌忙不住、肚裏尋思道、儻若胡亂教他喫醜了、是倒教丈夫装做愰子。索性拿了回去、叫丈夫看。(『奇談』)

（【甲活欲は見たら】却って師直が手で書いた情書である。慌てて思った。若し彼に恥をかかせば、これは却って夫に面目を失わせる。いっそ家に持ち帰って、夫に見せる。）

◎争些兒（アブナイコト・22a）

『譯解』ホドンド。スデノコト

『鈔譯』険些児同シアブナイカゲン　アブナイカゲンスデノコト

『字彙』アブナヒカゲンデ　スデノコトニ

我是執政重臣、低頭拱手来要求免罪、但是兄長能辨幹事的人、教下官宥殺死了。儻若外人如此、必定我此首領一轱轆、争些兒、不瞞哥哥説、那一天就在你的背後、合掌下拜。(『奇談』)

（私【高執政】は執政の重臣で、頭を下げて寛宥を求めている。兄（若狭介）は分別がある方で、兄に頭を下げてもいいが、若しほかの人に謝罪しなければならないなら、私は絶対死を選ぶ。危なかった。兄さんを騙さないが、あの日、あなたの後ろで、合掌して、拝礼した。）

近世漢語においては、「もう少しで、、、になる」という意味で、「もう少しで危ない境地になる」のニュアンスである。従って、『奇談』は正確にニュアンスから訳したと考えられる。

◎壁廂（ズンド・22b）

『鈔譯』一邊ト同シカタハラデ也

『字彙』這壁廂ハコノズンドト云コト又カタワキヲ壁廂ト云総ジテアノズンドナドト物ヲ指テ云コト

高執政道、有甚貴恙、把薬剤来與你服、若狭介道、壁廂不消費心。(『奇談』)

(高執政が言うには、お尊体は大丈夫ですか。薬を持ってあげる。若狭介が言うに、全くお気遣いなさらぬように。)

近世漢語に「這壁廂」の形で使われ、「這壁」、「這廂」との略の形もある。意味としては「この辺」で、『奇談』でのように、副詞的な使い方で、「まったく、、、ない」という例を見当たらなかった。

◎這般田地(カヤウナバシヨ・24a)

『鈔譯』場處ナリ

今日是殿下公事冗忙、連我也擺撥不開、顧不到這般田地。(『奇談』)

(今日は殿下がとても忙しく、私まで暇がなく、この状況を構っていられない。)

「田地」は近世漢語において、「場所」、「路程」、「程度」の幅広い意味を持っているが、『奇談』において、具体的な使い方「場所」しか訳されていない。

◎兜搭(イブカリ・53a)

『譯解』ムツカシキコトト云コト也ムツカシキ人ヲ兜答的人ト云

『鈔譯』人ノ生レツキノアシキ意地ノアルコト

『字彙』イブリナコト

母親抹了淚眼、直走到勘平身邊、兜搭盤問。(『奇談』)

(母親は涙を拭いて、直ちに勘平の前に行って、訝って根問いした。)

近世漢語において、「山道が険しい」、「ことさら話題を探して話しかける」、「人がうるさくて扱いにくい、手に負えない」という意味で、『奇談』のように「訝る」ニュアンスではないが、文脈に合わせた訳し方であろう。

4. 終わりに

ここでは、『奇談』にもみられる水滸語彙をまとめてみた。あわせて 62 例のうち、興味深い例の傍訳を 7 例分析した。その結果、中国近世漢語の意味とずれがあると思われる語彙例と言いながら、実は『奇談』の文脈を考慮した上での意訳と言えるのではなかろうかと思われる。『奇談』が成立した 1815 年前後、中国近世漢語（白話）の受容がブームになり、白話小説の和訓、翻訳、翻案が流行り、近世漢語への理解が高まった時期に、中国語で書かれた漢文小説は意識的に白話を取り入れ、しかもより正確的に利用することができたことは無理がなかろうと思われる。

注

1）岡田白駒口授、艮齋口述校正 1727（享保 12）。唐音表記はない。序から 120 回までに採択した語句に釈義を付す。百二十回本の『水滸全傳』を底本にしたと思われる。

2）陶山冕、1760 以降宝暦期か。唐音表記はない。首題に「忠義水滸伝鈔訳　土佐陶冕撰」とあって、宝暦七年刊行本の続きとみられる。長澤は「陶山本の刊本及び続稿の写本」とするが、自筆稿本であるか写本であるかは不詳。十七回から百二十回に及びこれで陶山は全巻注釈をなしたものと考えられる。

3）日本で初めて小説の語句を集め、小説専門の辞書であると銘打って出版された『小説字彙』は、寛政三年（1791）に初版され、著者の秋水園主人については、未詳である。その内容のうちは誤字脱字が多く、語句の解釈にも誤りが多いと言われる。

4）奥村佳代子『江戸時代の唐話に関する基礎研究』関西大学出版部 2007

参考文献

杉村英治「海外奇談―漢訳仮名手本忠臣蔵―」『伝記』第 3 輯三古会 1979

香坂順一『白話語彙の研究』光生館 1983

奥村佳代子『江戸時代の唐話に関する基礎研究』関西大学出版部 2007

胡竹安『水滸詞典』漢語大詞典出版社 1989

徐宗才『俗語詞典』商務印書館 1994
陳慶浩「古代漢文小説弁識初探」『日本漢文小説の世界―紹介と研究―』日本漢文小説研究会編 2001
許少峰編『近代漢語大詞典』中華書局 2008

作者について

于増輝（うぞうき）中国肇慶学院外国語学院日本語準教授。日中言語接触。博士（日本言語文化学）。主な論文に「『雨月物語』における白話語彙研究」（『水門―言葉と歴史』第 25 号 2013）、「日本現存水滸辞書研究」（『言語文字学』2016）、「南総里見八犬伝における白話語彙再考」(『当代日本語教育と日本学研究』2016) などがある。
本論文は教育部留学帰国人員科研始動基金項目（【2015】1098）「日本江戸時代水滸語彙受容研究」、広東省哲学社会科学「十三五」計画項目（GD16YWW02）「日本近世中国白話語彙受容研究」の研究成果である。